

ニーチェにおけるゲーテ像

福田 行之

Das Goethe-Bild bei Nietzsche.

— Eine Skizze —

In dieser kleinen Abhandlung gab ich einen Umriß des Goethe-Bildes bei Nietzsche. Nietzsches Goethe-Bild ist sonderbarerweise, wie Bertram hinweist, nicht das der Sturm-und-Drang-Zeit, sondern das des eckermannschen „Gesprächs“, des klassischen weimarischen Weisen. Dies bedeutet Nietzsches höchst widerspruchsvolle Natur, die gerade das, was ihr polar ist, begehrt. Nietzsche spricht von Goethe, im allgemeinen gesehen, immer in Bezug auf das „Leben“. Dieses „Leben“ bezieht sich, dem Gedankengang Nietzsches entsprechend, einerseits auf das Problem der „Kultur“, die einzelne Leben der Menschen im wahren Sinne des Wortes aufblühen läßt, andererseits auf die vollkommene dionysische Bejahung des irdischen Daseins. In dieser Hinsicht erwähnt Nietzsche bald Goethe, der „kein deutsches Ereignis, sondern ein europäisches“, „eine Kultur“ ist, bald Goethe als den „Verklärer des Daseins“, der „nicht mehr verneint“.

Goethe konnte für Nietzsche das ganze Leben hindurch stets ein mustergültiges Vorbild bleiben, angesichts dessen konnte Nietzsche mit ruhigem Gewissen die zuverlässige Bestätigung seines letzten Gedankens erfordern, während Schopenhauer und Wagner unter seiner scharfen schonungslosen Kritik heftig verneint wurden.

トーマス・マンが、その独自の文学テーマ「生」の問題を学んだのはニーチェとゲーテからであった。「精神の三連星」—ショーペンハウアー、ヴァーグナー、ニーチェ—の影響下においてマンは「精神」と「生」の深刻な乖離に苦しみ、大きな円を描きつつ、ついに偉大な総合であるゲーテに還った—あるいは還ろうとした。マンはニーチェの「生」からゲーテの「生」へと、その文学的苦闘の歩を進めたのである。マンにとってそれは一つの間回復の行程であった。それは大ざっぱに見ると、根本的な相違にも拘らず、ニーチェの描いた軌跡の踏襲であるかのように見える。ニーチェの場合その青年時代の教師であるショーペンハウアー、ヴァーグナー、ゲーテのうち前二者は大胆で容赦ないニーチェの思索過程の中で否定され克服されて行くけれどもゲーテだけは最後まで持続してその輝きを失わない。いなむしろニーチェ

におけるゲーテ像は、晩年に近づくにつれてその輝きを増して行くのである。1874年、30才の文献学者ニーチェはその遺稿断片の中で云う。「文献学者たちの出会った最大の出来事は、ゲーテ、ショーペンハウアー、ヴァーグナーの出現である。かくて人は更に遠くに及ぶ一瞥をなすことが出来る。」この青年期のニーチェがあげた三つの名のうちショーペンハウアーとヴァーグナーの名は批判と克服の目標として否定されて行くがゲーテの名は最後まで残りニーチェの星座を徐々に高みに登り続けるのである。

ニーチェにおけるゲーテ像は、ベルトラムも指摘しているように、シュトルムウントドラング期のそれではなく、特徴的なことにクラシカーゲーテ、エッケルマンとの「対話」のゲーテである。その青年時代から晩年に到るまで一貫してニーチェの背後にあるのは—そしてニーチェがつねに語

りかけ、自らの「反時代的」「超ドイツ的」思索の保証を求めるのはワイマールの賢者、「対話」におけるゲーテなのである。このことは一見奇妙に思われる。ニーチェとクラシカーゲーテ。「極端の魔術師」ニーチェと自らの限界を知ったワイマールの賢者ゲーテ、それは一見火と水のように相容れないものようである。相容れないが故にこそ—自らの資性と相反するものをこそまきしく烈しく希求するニーチェの調和を知らない特性に従って—ニーチェはクラシカーゲーテに傾倒したのであろうか。あるいはそこには何らかの必然的なつながりがあるのであろうか。つながりがあるからこそ「悲劇の誕生」から「人間的」へ、そして又反転して「ツァラトゥストラ」へと変転したニーチェの思索の全過程を通じてゲーテはつねに変らぬ重要性を持ち続けたのであろうか。ともあれニーチェとゲーテを結ぶもの、ニーチェがつねにそれに関連してゲーテの名を呼び出すものを図式化して云えば、トーマス・マンにおけるニーチェからゲーテへの移行が示すごとく、「生」の問題であると云えよう。それはニーチェの思索過程の変化に伴って二つの面を持っている。一つは「文化」「^{ビルドゥング}教養」の概念と密接に結びついた「生の概念」であり、一つは一切の地上的なものを肯定する満ちあふれた「生」の概念である。前者はニーチェの青年時代—特に「反時代的」及び「人間的」の時代—に対応し、後者は後期—「ツァラトゥストラ」以後の時代—に対応するということが出来た。前者においては傾倒と讚美にも拘らずゲーテの持つ非悲劇的、非ディオニゾスの素質及び性向に対する非難が伴うが後者においてはゲーテはディオニゾスと等置され殆んど非難の影をとどめない。ニーチェにおけるゲーテ像を分析すると大体以上のようなものでありニーチェはつねに以上のような問題に関連してゲーテ像を描くのである。

☆ ☆ ☆

「反時代的考察」時代のニーチェの全思索は、一点をめぐって—「文化」の一点をめぐってなされている。ドイツ文化の将来に対する配慮が彼の最大関心事である。ニーチェにとって当代のドイツ—19世紀後半のドイツにはフランスに対する軍

事的勝利やその氾濫する歴史的教養にも拘らず文化は存在しない。反ってそのような歴史的教養は、いかに豊富であっても「様式 Stil の統一」を持たない雑然たるものであるが故に文化Kulturの概念とは相容れないものである。「様式の統一」を持たない限り過剰な歴史的教養は「歴史の病い」であり生を蝕むものなのである。

ニーチェは「文化」の概念について「反時代的考察、ダヴィット・シュトラウス」において次のように説明している。「文化は何よりも先ず一族のすべての生の表現における芸術的様式の統一である。多くのことを知りかつ学んだということは文化の必然的な手段でもなく、そのしるしでもなく、場合によっては文化の反対物、野蠻、即ち無様式あるいは凡ゆる様式の混沌^{カオス}錯雑と容易に一致する。」⁽¹⁾そしてニーチェは統一的な様式を持たない過剰な教養を「文化」と取り違えて自己満足におち入っている当代ドイツの教養人を「教養俗物」Bildungsphilisterと名づけるのである。前掲の言葉の書かれている節の末尾でニーチェはドイツの似而非文化に対するこうした非難を「ドイツ人に対して云う権利を持っている少数者の一人」ゲーテの言葉をエッケルマンの対話の中から引用している。「我々ドイツ人はつい昨日のものだ。我々はなるほど一世紀以来、実に懸命に自らを教育して来た。しかし我々の同胞の間に豊かな精神と高度の文化が浸透し一般化し彼等が野蠻人であつたのは昔のことだったと云われるようになるにはまだ数世紀かかるかも知れない。」⁽¹⁾クラシカーゲーテ—ドイツの文化的貧しさと惨めさをその「野蠻さ」を着実な歩みで克服して行ったゲーテ—かかるゲーテはニーチェにとって「超ドイツ的」な出来事である。ニーチェにとってゲーテはドイツという狭い国家的出来事ではなく、「ヨーロッパ的出来事」である。「生に対する歴史の利害」のための遺稿の中でニーチェは次のように云っている。「ゲーテは典型化された人間として、かつてのいかなるドイツ人よりも高い所に到達した。……人はエッケルマンを読んで自問して見るがいい。かつてドイツにおいて一人の人間でも高貴な形式でそれほどの所まで達しただろうか。そこから単純と偉大に至るのは云うまでもなく遠

い。けれども我々はゲーテを飛び越えることが出来るなどと決して思っ**て**はいけない。我々**は**つねに再びゲーテのように始めなければならない。」ニーチェにとってゲーテは「よくドイツ的たることはドイツ的でなくなることを意味する。」⁽²⁾ という「人間的」において方式化された彼の命題のもっとも模範的な例である。ニーチェは同書の中でゲーテに関して次のように云う。「ゲーテはいかなる点においてもドイツ人を超えていたし今でも矢張りそうだ。…ベートホーヴェンがドイツ人を超えて音楽をつくりショープンハウアーがドイツ人を超えて哲学したようにゲーテはそのタッソーそのイフィゲーニエをドイツ人を超えて創作した。」⁽³⁾ 「ゲーテの高貴さと嫉みのなき、ベートホーヴェンの気高い隠者風の諦念、モーツァルトの心情の優美典雅、ヘンデルの不屈の男らしさと法則の下**の**自由、栄光と成功を断念する必要さえないバハの悠々なる光に包まれた内面生活」⁽⁴⁾ —それはニーチェにとって決して「ドイツの特質」ではなくドイツ人がそれに向って努力し達成すべき目標である。そして「ゲーテの声とその模範は、ドイツ人が他の諸国民に有益になろうとし、それ所か我慢出来るというだけのものにもなろうとするなら一個のドイツ人というより**以上**のものでなくてはならぬこと—そして**どう**いう方向で彼は自分を超え自分を脱け出て行こうと努めなければならぬかということを示している。(同書) ニーチェは彼の命題「よくドイツ的たることはドイツ的でなくなることを意味する」を正しく理解し得る人間を当代ドイツに見出すことが出来ない。後期の遺稿の中で彼は云う。「私は幾分絶え行く種類のドイツ人であるようだ。私はかつて『よくドイツ的たることはドイツ的でなくなることを意味する』と云ったことがある。然し人は今日この事を承認しようとし**ない**。ゲーテならば恐らく私の云うことを正しいとしたであろう。」フランスに対する軍事的勝利はニーチェにとってフランスに対する文化的敗北におち入る危険を内包するものであった。1870年11月、戦場からバーゼルに帰ったニーチェはこの戦いの勝利がもたらすドイツ文化に対する危険についてゲルスドルフにあてた書簡の中で次のように云う。「私は現在

の文化状態に対して非常に心配しています。我々がこの法外な国民的成功のために、少なくとも私がいかなる損失も我慢出来ない領域において余りに高い代価を支払わねばならないようなことにならなければいいのですが。打明けて云えば私は現在のプロシヤを文化にとって極めて危険な力だと思っています。」⁽⁵⁾ プロシヤのみならず一般に「国家主義」なるものはニーチェにとって創造的な文化の反対概念である。この点においてもニーチェの「良きヨーロッパ人」の背後には「文化と野蠻ということだけを重要事とする」「対話」のゲーテがあるのである。「革命」に反対する態度においてもニーチェはクラシカージェテを範例とする。両者にとって「革命」とは文化を成立せしめる必須条件であるところのあらゆる様式の「混沌錯雑」あるいは無様式を意味する。「偶像の薄明」でニーチェは云う。「私は、革命を感じるに必然的な仕方**で**、即ち**嫌悪**をもって感じた人をただ一人しか知らない—ゲーテである。」⁽⁶⁾ 革命的—浪漫的様式理想、ヴァーグナー的混沌の芸術理念に対してニーチェはゲーテの古典主義を範例として掲げる。浪漫主義をデカダンスとして、ニヒリスティックな運動として、又浪漫主義的芸術家を欠乏に悩むデカダンスとして心理的に解剖するニーチェの文明批評の方法は1829年3月のゲーテのエッケルマンとの対話中の有名な定義—「古典的なものを私は健康なものと名づけ浪漫的なものを病的なものと名づける。」—と深い所でつながる。統一的な様式を持つこと、混沌と雑駁さから身を守り自らの周りに限られた **Horizont** を画然とめぐるすこと—それがニーチェにとって個々の生を本当の意味で開花させる文化であり、かかる様式の中でこそ始めて「美」が現前するのである。ショープンハウアー、ヴァーグナーの影響圏内にあったニーチェにとっても、それから脱れそれを敵として戦ったニーチェにとってもかかるゲーテの古典主義の様式理想が彼の範例であることに変りはない。すでにかかるゲーテ的な様式への要求は「反時代的」諸篇の根本理念の一つであるし、「生に対する歴史の利害」のための覚え書の中でニーチェは次のように云っている。「様式への道は歩まねばならぬ。飛び超すことは出来ない。

……ゲーテの劇場管理を見よ。」そして「曙光」のための手記の中でニーチェはゲーテの古典主義を浪漫的革命的「ドイツ的」な様式理想に対して弁護している。「ドイツ人は力というものは苛酷と残忍さの中にか見出されないと考えている。そういう場合には彼等は温和と平静の中に力があるということを容易に信じようとしない。彼等はゲーテに力を見出すことが出来ずベートホーヴェンをもっと力があると思って大変な誤りを犯すのだ。」ゲーテはニーチェにとってついに「一つの文化」となる。クラシカーゲーテ、ワイマールのゲーテはニーチェにとって殆んど「文化」の代名詞である。「人間的」の中でニーチェは云う。「ゲーテは自国民に対して現存とか斬新とか時代後れとかいう関係には立っていない。ただ少数の人々のためにだけ彼は生きて来たし今もなお生きているのである。大多数の人々にとって彼は人が時々ドイツの国境の彼方に吹きたてるところの虚栄のラッパに過ぎない。ゲーテは善良で偉大な人間であるばかりでなく一つの文化である。ゲーテはドイツ人の歴史の中の後継者のない偶発事である。」(7) ドイツの後進性と惨めさと野蠻さの中にあつて毅然とそれに耐え自らの達した高みを守り抜き「一つの文化」たり得たゲーテは、19世紀後半ドイツの似而非教養と似而非文化を批判攻撃しつつ次第に救い難い孤独の「高み」へ追いつけられるニーチェの暗い悲観的な視野の中で一つの「偶発事」「一個の例外」となる。「価値転換」時代の遺稿の中でニーチェはゲーテを自らの孤独な像に著しく近づけながら云う。「ゲーテは一個の例外である。彼は巧妙な仕方でも身を保護し仮装しながら……ドイツ人の間で生活した。ゲーテは孤立している。敬虔主義とギリヤ精神の中間に、フランス語で書くべきではないかと疑いながら。」

ニーチェにおけるゲーテ像は肯定的なものばかりではない。ニーチェがどうしても承認し得なかったのはゲーテにおける非悲劇的、非ディオニソスの素質であり性向であつた。ニーチェにとってゲーテは余りにも宥和的であり、非ディテュランボスの、非オルギアスムス的なのである。「反時代的考察第3、教育者としてのショーペンハウアー」

の中でニーチェはルソーの人間像及びショーペンハウアーの人間像と比較対照しつつゲーテ像について次のように云う。「ゲーテの人間はそのような(ルソー的な)脅威的な力ではない。むしろある意味ではまさにルソーの人間が身を委ねたあの危険な興奮の中和剤、鎮静剤でさえある。……ゲーテの人間はルソーの人間を回避する。何故なら彼はあらゆる暴力的なもの、あらゆる飛躍を憎むからだ。一ということとは然しあらゆる行為を憎むということだ。それ故世界解放者のファウストからいわば単なる世界旅行者しか生じないのだ。ゲーテ的人間は維持的調和的な力である。然し…俗物に墮落する危険がある。あたかもルソーの人間が容易にカティリーナの人間になりがちなように。」(8) そしてニーチェは、「人間的」の中の、ゲーテをドイツにおける「偶発事」である「一つの文化」として賞揚した一つ前の「ファウスト的理念」と題してアフォリズムの中で彼一流のイローニッシュなやり方で非悲劇的な、宥和的なゲーテ像を次のように描く。「一人の小さなお針娘が誘惑され不幸にされる。四学部全部の偉い学者が下手人である。……これが一体本当にドイツ人の間で云われているように最大のドイツの『悲劇的思想』であるというのか。一ゲーテにとってしかしながらこの考えできえまだ余りに怖しいものであつた。彼の優しい心はこの小さなお針娘、『ただ一度われを忘れた善良な魂』を不本意な死のあとで聖者の近くへ連れて行かざるを得なかつた。それどころか彼はこの偉い学者、暗い衝動を持つ『善良な人間』をも丁度いい時に天国へ上げてやるのである。ゲーテはかつて本当に悲劇的なものに対しては彼の本性は余りに宥和的であつたといっている。」(9) ワイマール時代の自らに危険なものはその身边に寄せつけない賢者ゲーテの中に、ニーチェはディオニソス的なものに対する余りにも細心な用心を、のみならず恐怖を見る。「ゲーテがハインリッヒ・フォン・クライストに感じたものは、彼が回避していた悲劇的なものの感情であつた。それは自然の癒し難い側面であつた、彼自身は宥和的で癒し得るものであつた。」これは1870年のニーチェの言葉であり、1873年には一層鋭く次のように云う。「ゲーテはクライストを恐れる。」

ゲーテの古典主義は、結局ディオニゾス的なもの
 として十分ギリシ
 月]においてニ
 ンケルマンとゲ
 いう概念を吟味
 生じた要素—
 オルギアスムスとは相容れないのを知ると我々の
 心は痛む。ゲーテが彼の主義としてこのようなも
 のをギリシャの魂の諸可能性の中から排除したで
 であろうことを私は実際疑わない。従ってゲーテは
 ギリシャ人を理解しなかつたのである。何故なら
 デイオニゾス的密儀の中に、デイオニゾスの
 状態の心理学の中に初めてヘラス的本能の根本事
 実—その『生への意志』が発現するのであるか
 ら。」(10)

ニーチェは以上のようにゲーテの非ディオニゾ
 ス的な根本志向を不満とし批判したにも拘らず、
 後期のニーチェの思想の天空でゲーテの像はいよ
 いよその輝きを増す。バーゼル時代の若きニー
 チェにとってゲーテは本質的には結局高い様式の観
 照の静観的人間であり、行動的な人間であるより
 もむしろ維持的宥和的力であったのに対して「ツ
 ヲラトウストラ」以後のニーチェのゲーテ像は
 「然りを云い然りを行ふ」ディオニゾス的人間像
 に高められるのである。後期のニーチェはゲーテ
 像と自らの間にほとんど区別を立てることを欲し
 ないように見える。その素質上性向上の埋め難い
 相違は意識的無意識的に忘れ去られゲーテ的とデ
 イオニゾス的といふいかにも相反する概念が後期
 のニーチェに至って結びつく。ボイムラーの云う
 「仮面の哲学者」ニーチェはあたかも「ゲーテ」
 の仮面の下でディオニゾスを演じようとしている
 かの如くである。「偶像の薄明」におけるゲーテ
 像は次の如きものである。「彼(ゲーテ)が欲し
 たものは総体性(Totalität)であった。……彼は
 全へと自らを訓練した。彼は自己を創造した。…
 …ゲーテは非現実的志向を持つ時代の真只中で確
 信せる現実家であった。彼はその中で自己に同質
 のすべてのものを肯定した。彼はナポレオンとい
 う名のもっとも現実的なものより大きな経験を持
 たなかつた。ゲーテは強い、高い教養のある、す
 べての現世的な事柄に熟達し、自己を制御し、自

己に対して畏敬を持ち、自然性の全領域と豊かさ
 を自分のものとする人間、このような自由に対し
 て十分強力な人間、即ち弱さからではなく、強さ
 からの寛容の人間—何故なら普通の人間なら破滅
 するであろうようなものをこのような人間は自己
 の利益として利用することを心得ているからであ
 る—それが悪徳であれ美德であれ弱さ以外の何も
 のもはや禁ぜられていないような人間を構想し
 た。かかる自由になった精神は悦ばしく信頼に充
 ちた宿命論をもって、ただ個別的なもののみが非
 難に値し全体においてはすべてが救われ肯定され
 ると信じつつ万有のただ中に立つのである。彼は
 もはや否定しない。そのような信仰はしかし、あ
 らゆる可能な信仰の中で最高のものである。私は
 それをディオニゾスの名をもって命名した。」(11)
 かくしてゲーテ的総体性の信仰は、特徴的なこと
 にアポロやエロスの名でなくディオニゾスの名で
 もって命名され、その余りにも宥和的性向のため
 に「ギリシャ人を理解しなかつた」ゲーテは忘れ
 られるのである。このようにして、「もはや抗議
 せず疲労もせず総体性の中で初めてすべてのもの
 が救われ善として、正当なものとして現われるの
 だと信じつつ自己自身の中から総体性をつくり出
 そう」とする悦ばしく信頼に充ちたゲーテの宿命
 論は、ついにニーチェの永遠回帰的世界像の中へ
 組み込まれて行くのである。遺稿の一節は云う。
 「もしある人がゲーテのように益々増大する悦び
 と情愛をもって『現世の事物』に関わるならば、
 それは出来のよさのしるしである。即ち彼は、人
 間が自己自身を浄化することを学ぶとき存在の浄
 化者(Verklärer des Daseins) となるという人
 間についての偉大な理解を自分のものとするので
 ある。」(12) 浄化としての芸術、^{アポテオーゼンクンスト}「神的の芸術」
 としてのゲーテの古典的芸術は、キリスト教的浪
 漫的な苦悩と復讐の芸術、ペシミスティッシュな
 芸術、ショーベンハウアー及びヴァーグナーの芸
 術と対立せしめられ「存在」の「浄化」の形式と
 なる。それは「感謝と愛に由来し……恐らくルー
 ベンスと共にディテュランピッシュであり、ハー
 フィスと共に至福であり、ゲーテと共に明るく善
 良であり、あらゆるものの上にホメロスの栄光
 の輝きを投げかける。」(13) (遺稿) 又ニーチェは

自己の「反キリスト」の立場のもっとも確かで安心の出来る保証人として寛容な異教徒であるゲーテを引き合いに出そうとする。「偶像の薄明」は云う。「ゲーテは私が畏敬を抱く最後のドイツ人である。彼は私が感じるところの三つの事柄を感じたであろう。又我々は『十字架』についても理解し合う。」⁽¹⁴⁾然しながらこの「我々」という云い方はそれを読むものに奇妙な不協和音をもって響く。その不協和音はこの両者の間にある超え難い断絶を暗示するかのようである。後期のニーチェの、自己とゲーテを同一視しようとする度重なる努力にも拘らず、所詮極端な「反キリスト」にして「十字架にかけられた」者たるニーチェと素朴で寛容な異教徒ゲーテの像とは重なり合わない。それにも拘らず、ニーチェが自己の到達した最後の哲学の最後の抛り所、最後の保証としてゲーテをくり返し呼び出したということは結局ゲーテの偉大さ、深さ、広さを如実に示していると思われる。

ニーチェにとってゲーテは、その青年時代から発狂の年に至るまでつねに自らの像を映しそして信頼してその保証を求めることの出来たいわば唯一の鏡であった。ショーペンハウアーやヴァーグナーはそうではなかった。彼等はすべてを包含する偉大な「総体性」を持たず一義的な人間像たるを免がれなかった。それ故いかに大きな影響を与えたにしろ結局生涯にわたってニーチェの範例とはなり得なかった。ゲーテはそれに反して全体的な人間像—「全人」であったし、ニーチェが結局生涯にわたって、「断片であり千切れた四肢であり残忍な偶然」⁽¹⁵⁾である「断片人間」の中において心底から希求したのはかかる「全人」であったのである。然しニーチェの試みは、秋の静かな日光の下に果実が熟するような形を、いかに彼がそれを熱望していたとしても、始めからとることが出来なかった。彼は極端なラディカルな仕方ですべて「ニヒリズム」を転換しなければならなかったのである。ゲーテ的全人の像とニーチェの絶望的な試みとの差違は結局、つきつめると「近代性 (Modernität)」というもののもつ問題性に帰着するであろう。ゲーテにおいてはまだ口を開けていなかった Modernität の深淵がニーチェにおい

てはもっとも怖るべき形で露呈したのである。

Text

- A) Werke in 3 Bdn. hrsg. von Karl Schlechta
C. Hanser Vlg. München 1960
- B) Nietzsches Werke in 12 Bdn. Kröners
Taschenausgabe 1956

Literaturen

- C) Erich Heller: „Enterbter Geist“ Suhrkamp
Vlg. 1954
- D) Ernst Bertram: „Nietzsche“ Georg Bondi in
Berlin 1938

Anmerkungen

- (1) A) Bd. I. S. 140f.
- (2) A) Bd. I. S. 851
- (3) A) Bd. I. S. 800
- (4) A) Bd. I. S. 843
- (5) A) Bd. III. S. 1029
- (6) A) Bd. II. S. 1024
- (7) A) Bd. I. S. 928
- (8) A) Bd. I. S. 315f.
- (9) A) Bd. I. S. 927
- (10) A) Bd. II. S. 1031
- (11) A) Bd. II. S. 1024f.
- (12) B) Bd. 78 Der Wille zur Macht S. 553
- (13) B) Bd. 78 Der Wille zur Macht S. 568
- (14) A) Bd. II. S. 1026
- (15) A) Bd. II. S. 393